

## 柳江庵鸞亭撰会所本『俳諧花神楽』の紹介と翻刻

富 田 和 子\*

### はじめに

本誌四十七号人文科学編「柳江庵撰会所本『狂俳袖濡す』の紹介と翻刻」で、撰者の柳江庵鸞亭は、『名府玉尽し』全（文化五（一八〇八）年）に、井上士朗と並んで、「上上吉 点者 鸞亭」と掲載され、「文化五年には名古屋でとても有名な俳諧冠句点者であり、その後、狂俳撰者となっていたことがわかる」と紹介した。本稿では、それより少し前、文化二年の鸞亭撰会所本『俳諧花神楽』を紹介する。

この文化二年当時、鸞亭は岐阜に住んで撰を依頼されたものか、既に名古屋に出て来た後のものかはっきりしない。しかし、既に翻刻・紹介される『俳諧梅催集』（寛政十二（一八〇〇）年二月 萱津（現在の愛知県あま市）横笛山光明寺開巻）と比較すると、冠句は各丁の三句目と四句目に、折句は各丁の十句目に配される特徴がある。おそらく本書の撰では、意識して冠句と折句を配置したのではなからうか。

次に、簡単に書誌を記す。

### ○『俳諧花神楽』

文化二乙丑（一八〇五）年八月撰。撰者、柳江庵鸞亭。願主卷本、三州伊保（現、愛知県豊田市）朝浦。興業の目的、「猿投山御社奉納」。小本（一五・一二・三三）。墨付き十二丁（表紙共）。共表紙。百句掲出。卷末に朝浦と鸞亭による三つ物を掲載。冠句は各丁の三句目と四句目に、折句は、現在の狂俳興行と同様に、各丁の十句目に配されている。吉澤聚湊蔵。

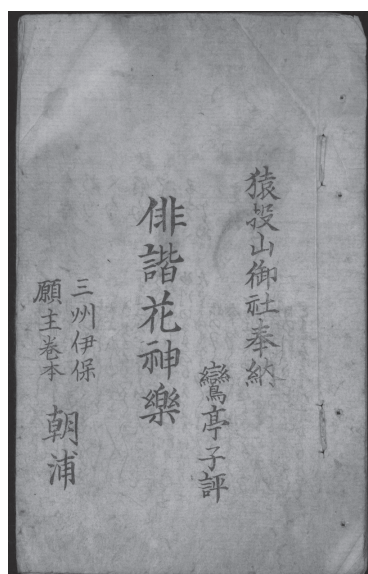
句の種類は、句、折句、×句、冠句、ツギ句、物題、定題とあり、合計四十二題。詳細は翻刻参照。

### ○凡例

翻刻にあたり、読解の便をはかって、次のように扱った。

- 1、濁点、句読点を施した。ただし、底本にあるものと、恣意に施したものとを区別していない。
- 2、異体字を含めて漢字は原則として通行字体に改めた。ただし、例外もある。
- 3、慣用・誤用の漢字や仮名遣いは、誤解のないと思われるところはそのまま残した。

- 4、(一) 内の文字及びルビは、恣意に施したものである。
- 5、※以下に、簡単な語釈を記した。ジャパンナレッジ掲載の『日本国語大辞典』『角川古語大辞典』『国史大辞典』等を参照。
- 6、底本は、吉澤聚湊蔵本を使用した。



○『俳諧花神楽』

猿投山御社奉納

鸞亭子評

俳諧花神楽

三州伊保

願主卷本 朝浦

表紙

句 春  
折句

水すら／＼と峯の山吹  
朝日静に／＼  
日本ハおろか凡唐にも  
よふハこらへて是を今迄

又句

一六

冠句

ツギ句

早ふ見たがる物

定題

成程／＼

ちらり／＼と／＼  
玉に疵じやと／＼  
きせるくハへて／＼  
一生に二度ハ有まいこんなこと  
わや／＼と明の六ツからより合て  
四五日のうちにハもはや四五日の  
砂川のきれいな水にかけ造り  
たきものもほかり／＼と金襴  
始のつらさ今の嬉しさ  
命から／＼漸と先ツ  
無ふても至極よさそうな事  
月の内にハ二度も三度も  
思ひがけなき事でこそあれ  
日のくれるのを待て居る也  
これ太平の印なりけり 見返し

※かけ造り（懸造）＝川の上にさしかけて造った建物。風流の造作。

※ここでは、折句題の「フキ・ハナノ」、又句題の「伊勢土産」、冠句題の「裏門・丸盆・よし／＼・並べ立・湖・雑兵・朧月・それ見たか・小雨降・嫁入り・けふも又・呼び合・むちゃくちや・弁天・目出たがり」、ツギ句題の「古へも今も」は、各句に記載されるため、略されている。下段はすべて前句付の題で、各句には最初の一字か二文字を略記する。

又句は、もじりのこと。これは、俳句形式の上五文字を題とし、中七文字と下五文字を付けるもので、中七に二通りの読み

を持たせ、上五と中七、中七と下五とで別の句意を生み出すもの。中七が腰に当たることから、特に「腰もじり」と呼ぶ。

ツギ句（継句）は、雑俳種目の一。八、九字の題に、下や上を付けて十七字句とする。「分別の外は」の題の下に「けぶたい子の手前」と付いたり、「うき名流す恋」の題の上に「夕顔の裏家に」を付いたりする。もともと笠付・沓付などから派生したものであるが、笠付・沓付などそのものをいうこともある。

日の 虫壳の基手ハ広き萩のはら 名古屋 禿紫  
砂 蚊帳にねながら花火見て居る 、 一鳳

▲ 裏門へいらぬ時分に螢来る 、 呂洲  
▲ 丸盆の御布施ころくくくと舞ふ 華本 一詠舎

き 慰に女房の異見聞て居る 三本木 甫石  
朝 辻番に餅屋尋る舟上り 卷本 朝浦

ち 鏡台で読む風鈴の左り文字 、 、  
※左り文字＝裏返しに見た形の文字。鏡に映って見える文字。

▲ よし／＼と掃内ばかり立せたり 名古屋 尹之  
▲ 並べ立誓る花生貸てやる 、 、

折 藤棚や二日の月の消か、り 、 甫水 一才  
き 人並に炉の炭覗く茶人客 ナゴヤ 一鳳

わ 雷の落たる藺田に繩はり 卷本 朝浦（浦）  
※藺田（いだ・いでん）＝畳表、花むしろ、灯心などの原料となる藺を作る田。収益性の高い藺は地味のすぐれた田でなくては育ちが悪く、また、中国筋や近江などでは藺の裏作に稲を植

えつけることができたため、検地の時には、麻田や麦田とともに上田の上位に格付けされるのが普通だった。《季・夏》。繩は墨縄のこと。墨縄は、墨壺（すみつば）についている糸巻き車に巻いてある

麻糸。木材などに線を引くのに用いる。繩をはるのは検地のためか。

▲ 湖の藻へ吸殻を明たなり ナゴヤ 一鳳

▲ 雑兵が日雇賃をバ分る也 アスケ 一峯下  
朝 船風の太鼓（鼓）打出す水主の衆 ナゴヤ 甫水

無 駕舁の誘る西瓜の土産物 トノガイツ 九臯齊  
日本 小鼓（鼓）もひゞく小室の華盛り イボ 漁笛

ツギ 古へも今も遊行ハ外が内 ハナモト 一詠舎  
※外が内＝外出がちである。

× 伊勢土産はしもとめ居る還御前 トノガイツ 九臯齊  
※「伊勢土産箸求め居る」と「橋も止め居る還御前」と読み分ける。

※還御＝天皇、法皇、三后が、出かけた先から帰ること。  
折 初花を夏見る木曾の野山哉 ナゴヤ 一鳳 一ウ

朝 御條目済で乗出す同者舟 ハナモト 一詠舎  
※同者＝「道者」「同社」とも書く。杜寺・霊場へ参詣・巡拝する旅人。多く、連れ立ってでかけたことから、道連れ、同伴

の者の意。

き しい鉢を和尚高見で御見物 、 、  
※しい鉢（強鉢・強）＝無理に食事をすすめること。

▲ 湖を吸って行雲京で降る ナゴヤ 一鳳  
▲ よし／＼と返事して本読で居る イボ 花月堂

玉 十三里隔つ都の夏さかな ナゴヤ 一鳳  
※夏さかな（夏魚）＝夏にとれるさかな。《季・夏》

わ 雪見の客が焚付る鍋 、 呂洲  
き 月落る迄ハ鵜飼も臂枕 ハナモト 一詠舎

ツギ 古へも今も赤坂貳百也 トノガイツ 一睡舎

※赤坂Ⅱ東海道五十三次の宿場の一。現在の愛知県豊川市音羽地区の地名。

※貳百Ⅱ旅籠屋の費用は、近世中ごろで、食事・宿泊を含めて百文から二百文ほどであった。宿泊費のことか。

又 伊勢土産すゝみてかふれ四条河 九臯齊

※「伊勢土産鈴見て換れ」と「涼みて、被れ四条河」と読み分ける。伊勢道中鈴、天狗鈴、鬼面鈴などの陶鈴は伊勢松阪土産。

※換れⅡとりかえる。交換する。

※被れⅡここでは全身で受ける意。「四条河原涼」江戸中期以降、京都の鴨川で、陰暦六月七日から一八日まで、四条川原を中心に行なわれた夕涼みの行事。北は三条、南は松原にいたるまでの中州や流れに水茶屋が床几を並べ、灯火を掲げ、納涼の客がつどい、飲食や弦歌でにぎわった。明治以後は期間を定めないうで行なわれた。川原涼み。四条涼み。四条の川原涼み。

《季・夏》

折 浜馬啼く舳の松に残る月 マキ本 朝甫(浦)二オ

き 有明に船曳つぐく芦の露 ナゴヤ 甫水

四 拾ふほど足らぬ猫の子 トノガイツ 一睡舎

丸盆の茶代をにらみすへて取る ナゴヤ 尹之

並べ立華足から先拝まれる 三本木 石香

※華足Ⅱここでは、仏前に盛る供物。

草鞋はく侘(マ)鉢寺の手習子 巻本 朝浦

夕日を覗く鵜飼見の客 タカハマ 瑚雪

接待の茶の下くべる華曇 イボ 漁笛

裏門を崩さにや出れぬ風作る ナゴヤ 一鳳

又 伊勢土産ひながきました初の孫 本郷 連中

※「伊勢土産日永来ました」と「雛が来ました初の孫」と読み分ける。「日永団扇」は伊勢国日永(三重県四日市市)の名産。

「雛」は雛人形の意。つまり、「伊勢土産の日永団扇が来た」と「初孫の初節句のために用意した雛人形が来た」の二通りの意。

折 鼻よ衾にかぶれ桐一葉 ナゴヤ 一鳳 二ウ

水 対陣(陣)に連歌始まる薄霞 ナゴヤ 甫水

※対陣Ⅱ向かい合つて陣を構えること。

き 粽結ふ手も力なし姉の乳母 ウチコシ ばんぐ堂

▲ 朧月寛の水がふとるなり 北新田 和水

▲ それ見たかなま兵法が駕で来た ハナソノ 芦州

よ 摺る度に指のよごるゝはした墨 巻本 朝浦

き 去状も来ず縫物も手に付ず トノガイツ 九臯齊

四 蒼を見せて戻る菊畠 ハナモト 一詠舎

ツギ 古へも今も痺は京登り 、 、

▲ 小雨降平山に鹿啼て居る ビハジマ 里斗

折 筆塚の古びて見えずきりぐす ナゴヤ 鷺川 三オ

玉 麦糠のかゝる床屋の牡丹畑 ナゴヤ 一鳳

朝 掃除して弓矢ならべる揚弓場 ハナモト 一詠舎

▲ 雑兵が早ふ片付たがる也 ナゴヤ 五條庵

▲ 嫁入に小舅ハ乳々呑んで居る 、 一鳳

始 ねぢむひて礼いふ灸の居へ仕廻 ハナモト 一詠舎

無 羽織着て肩衣かける門徒宗 ナゴヤ 禿紫

月 後見の後を覗く一家衆 牛ノ村 里蝶

ツギ 古へも今も紺屋ハ明後日 トノガイツ 九臯齊

※諺「明後日紺屋に今度「晩」鍛冶屋」Ⅱ(紺屋と鍛冶屋は注

文した日に品物が間に合わないことが多かったところから）信用できないこと、約束が当てにならないことにいう。

又 伊勢土産はりまで見やる淡路島 ハナモト 一詠舎

※「伊勢土産張、まで見やる」と「播磨で、見やる淡路島」と読み分ける。

※張＝荷物にならない伊勢土産として広まった伊勢音頭の唄囃子の高い調子の声のことか。

※播磨＝旧国名。現在の兵庫県の西南部。

折 蓮咲て夏を忘るゝ野守哉 ナルミ 高四萬 三ウ

思 早打に寄手の騒ぐ鸞が森 ハナモト 一詠舎

※『平家物語』巻八の木曾義仲軍に討たれた妹尾兼康の最期の場面「主従三人が頸をば、備中国鸞が森にぞかけたりける」を想起する。

命 角の石生きて一ぷく吸付る ナゴヤ 蝶々子

▲ 湖へばっぱくと麦あふつ 甫水

※あふつ（煽つ）＝風が吹いてあおり立てる。

▲ 朧月須磨物語り聞てなり トノガイツ 九臯齊

き 気さんじハ舟の喧嘩の行違 ナゴヤ 濱比

わ 井戸で御慶を済ます囁立 ハナモト 一詠舎

月 隠居家の床柱拭く煎粉糠 ナゴヤ 尹之

▲ けふも又深草へから戻りなり 一鳳

又 伊勢土産うちわかったり兄弟 霞夕

※「伊勢土産団扇買つたり」と「内別つたり兄弟」と読み分ける。

折 富士詣冬を見てきし昨日哉 甫水 四才

朝 乗懸へ馬子の取次是斎が湯 花本 一詠舎

※是斎＝江戸時代に広く行き渡った旅中薬、和中散のこと。摂津国西成郡の天下茶屋（津田氏）では、店頭に往来の人を休ませ、薬を湯にたてて供したという。

ち 筏士に松葉のかゝる大井川 卷本 朝浦

▲ 嫁入の焼物ハまだ海に居る ナゴヤ 一鳳

▲ よしくと又式人前膳を組む 三本木 葉木

玉 縮緬を着て馬に乗る京同者 ナゴヤ 一鳳

※京同者＝京から社寺参詣などに来た一行、なかま。

ち 印籠の八景見ゆる薄羽織 タカハマ 貴暁

き 雨晴に籠提て出る松露掘 トノガイツ 九臯齊

※松露＝担子菌類シウロ科のキノコ。扁球形または不規則な塊状で径一―五センチメートル。外皮は白く地中にうずまつているが空気にさらすと淡黄褐色となる。内部は白色、のちに熟して暗褐色に変わる。海辺の松林の砂中に生じ、春、秋に採集して食用にする。学名は *Phizopogon rubescens* 《季・春》

▲ 裏門を出ると鍛冶屋と傘屋也 イボ 山月

又 伊勢土産かわず出て来た苗代田 ナゴヤ 一鳳

※「伊勢土産買わず出て来た」と「蛙出て来た苗代田」と読み分ける。

折 刎退て七草摘也野路の雪 、 、 四ウ

朝 毛氈に銭をばらまく末社欄宜 ナゴヤ 鷺川

よ 釣針のすくなを笑ふ供廻り 花本 一詠舎

▲ 丸盆へ家越の針をほかられる ナゴヤ 古下

▲ 裏門ハ表門よりよけ通る 梅夫

命 うい事で出て来た御油の町はづれ トノガイツ 一睡舎

四 からし場見せるぬり立の室 ナゴヤ 関士



日の素裸で故郷へ帰る博奕武者  
成 鴉めに一歩くれてもねて見たい トノガイツ 九臯齊  
※鴉Ⅱ（黒い頭巾を被っているところから）「歌比丘尼」の異称か。

ツギ 古へも今も唐茶で済まされる  
※唐茶Ⅱ僧侶の隠語で酒をいう。

折 花の雲斜に見ゆる野中哉 ナゴヤ 甫水 五才

月 風呂入に来て夜を明す咄好き 卷本 朝浦

四 腹もみ下て行取揚婆々 ナゴヤ 尹之

▲ 朧月二見へ鴉啼て行 三本木 石枝

▲ 呼り合行違舟御慶いふ ナワ 闇鳥

き 雲助も義理を立場でいふ御慶 、 、

朝 青染をかける紺屋のもがり竹 卷本 朝浦

※もがり（虎落）Ⅱ枝のついた竹などを立て並べ、物を干すのに用いるもの。特に、紺屋で、紺掻きなどの干し場に高く作った設備。もがり竿。

わ 筆字を彩る開帳の額 イハサキ 里遊

※筆字（籠字）Ⅱ中を空白にし、輪郭だけ線で写しとった文字。

▲ 丸盆にひよこを鳥渡乗て見る 卷本 朝浦

※鳥渡（一寸・ちよっと）Ⅱ少し。

又 伊勢土産いたらいて見る棚普請 ナワ 闇鳥

※「伊勢土産行たら行て見る」と「居たら言て見る棚普請」と読み分ける。伊勢参りの土産話に古市遊郭に行つてみるの意と、「普請と葬式は一人できん」の諺のとおり、誰かいたら棚普請を手伝うよう声を掛けてみる意か。

句 花の雲猶有がたき花表哉 イボ 花月堂 五ウ

※花表Ⅱ神社の鳥居。

水 大名に負ぬ路考が四疊半 ナワ 闇鳥

※路考Ⅱ人名。歌舞伎役者の瀬川菊之丞の、初代より五代までの俳名。特に二代目が（一七四一―七三）有名で「王子路考」と呼ばれた。

わ 丸薬吞ます奈良の老鹿 ナゴヤ 柳葉

※丸薬は鉄砲の玉のことか。若い鹿はしないが、大きな老鹿は狩人に遭った時、その方に向つて前脚を交差させて突き立てて立ち向う違をする。猟人はねらつて射ても射はずすこととなる。

▲ 湖へ太鼓（鼓）の音がひびく也 ビハジマ 里蝶

▲ けふもまたくれたくで年がよる トノガイツ 一睡舎

無 去られ荷のゆたん取らせる謀（媒）人 ナゴヤ 関士

※去られ荷Ⅱ離縁されて実家に持ち帰る荷物。

※ゆたん（油単）Ⅱ箆箆や長持などにおおいかぶせる布。

※媒人Ⅱ仲人。

命 こわがつて戸棚風呂出る山家客 トノガイツ 一睡舎

※戸棚風呂Ⅱ江戸時代の公衆浴場の一種。湯気を出さないように、引戸をつけた戸棚に似た構造の風呂。浴槽が浅く、湯の量はひざを浸すほどであった。

始 槌松を渡す樋口が台所 卷本 朝浦

※槌松・樋口Ⅱ人形浄瑠璃『ひらかな盛衰記』三段目の登場人物。槌松は船頭権四郎の孫で、大津の宿屋で木曾義仲の嫡子駒若丸と間違えられ殺される。樋口は権四郎の娘およしへ婿入りしていた船頭松右衛門で、実は義仲の臣樋口次郎兼光。偶然にも若君を守護することになる。

▲ 湖へ橋の蛭をあふぎ出す 、 、

又 伊勢土産ふたみかい来た古手枕 イツミ田 船月堂

※「伊勢土産二見買い来た」と「蓋身買い来た古手枕」と読み分ける。

折 傍示<sup>ハウジ</sup>迄菜の花に埋む野道哉 ナゴヤ 呂洲 六才

※傍示<sup>ハウジ</sup>領地、領田などの境界を示すために立てた杭、石、札などの目印。

玉 股立に脚の毛足らぬ庄屋殿 ナゴヤ 甫水

※股立<sup>マタタテ</sup>袴の左右のあいている所を縫止めた所。

朝 御戸帳を泪で拌む善光寺 ヲヤマ 志同

※戸帳<sup>コチャウ</sup>神仏の厨子<sup>ス</sup>の上などに垂れる小さな帳。

▲ 嫁入に癒と江戸狎<sup>ア</sup>預たり ナゴヤ 一鳳

※癒<sup>イ</sup>発音による話のできない障害。また、その障害のある人。

▲ それ見たか鞠<sup>マユ</sup>が泉水およく也 花本 一詠舎

日本 岩も捻<sup>ひね</sup>そうな己が力瘤 ナハ 鬼笑

朝 隣同士調子聞合ふ相の山 トノガイツ 九臯齊

※相の山<sup>アイ</sup>伊勢の間の山で歌い始めた歌謡。後に門付芸にもなった。

よ 分散の店卸する一家衆 ナゴヤ 鷺川

※分散<sup>サンサン</sup>江戸時代の破産の一方法。自己破産。

▲ むちやくちやに勝手<sup>ツツ</sup>の役<sup>ツツ</sup>(薬) 味盛れたり イボ 漁笛

※役味<sup>ツツ</sup>葉味のこと。役にたつ味という意味で役味とよばれたこともあったようである。

又 伊勢土産あんちよくに有饅頭屋 、 、

※「伊勢土産安値(安価の意)に有る」と「安直(気軽の意)に有る饅頭屋」と読み分ける。

※安直(一)値が安く、手軽に入手できること。(二)気軽な

こと。容易なこと。

句 手にすくふ水にも添へり春の風 ナゴヤ 一鳳 六ウ

始 跡向<sup>アトムカ</sup>ひて出る谷汲の仁王門 卷本 朝浦

わ 書地をよごす書画の墨摺 ナゴヤ 鷺川

※書地<sup>カキジ</sup>「無地」に対して) 模様を描いた布、または紙などの地。

▲ 丸盆に乘袍乗せて餅もらふ 、 尹之

※袍<sup>ホ</sup>上着。

▲ 並べ立方灯扣(控)へて眠られる 、 甫水

始 練供養過て面ぬぐ仏達 トノガイツ 一睡舎

※練供養<sup>レンキョウ</sup>来迎会・迎接会の俗称。毎年五月一日(もと陰暦四月一四日)に、奈良県当麻寺で行なわれるものが有名。中将

姫臨終の際、二十五菩薩が来迎したという寺伝に基づき、

二十五菩薩に扮した僧が、極楽から娑婆に赴くさまの仮装行列

を行なう。京都市泉涌寺、岡山県誕生寺など現在でも各地に残っ

ている。《季・夏》

無 若殿の鬘斗目を笑ふ百姓衆 イボ 漁笛

※鬘斗目<sup>マタメ</sup>江戸時代、武士が礼装の大紋や麻袴の下に着用した小袖。

月 隣から持て来てくれる稽古鞠<sup>マユ</sup> 卷本 朝浦

▲ 雑兵があかぎれをそくくつて居る ナワ 閑庭

※そそくる<sup>ソソクル</sup>手でもてあそぶ。あれこれいじる。なでる。

又 伊勢土産はしそつてやる矢削川 ナゴヤ 甫水

※「伊勢土産箸そつてやる」と「橋そつてやる矢削川」と読み分ける。

※矢削川<sup>ハギ</sup> 矢矧川<sup>やはぎがわ</sup>（矢作川）のことか。文政九（一八二六）年頃、愛知県岡崎市の西を流れる矢作川に架かる橋は、木橋では当時最大の三九七メートルに達するとされた。（『江戸参府紀行』東洋文庫参照。）

折 初恋や名に橘の軒隣り ナルミ 高四萬 七才」  
日の 黒鉄の仕事すやくる師走前 トノガイツ 一睡舎

※黒鉄<sup>ニ</sup>ここでは、江戸時代の土工。主として川普請や新田開発工事を受け持った労働者。

※すやくる<sup>ニ</sup>方言。仕事などに手を抜く。

無 長橋の擬宝珠<sup>ギボウシユ</sup>はしがる古鉄屋 、 、

▲ 裏門は外より内が低ひ也 ナゴヤ 呂洲

▲ 嫁入<sup>ヒノシ</sup>に火熨<sup>マツ</sup>で杓<sup>マツ</sup>（酌）の稽古する 、 一鳳

命 関越へて黒汗ぬぐふむさし坊 ヨコ子 是此亭

※この関は、武蔵坊弁慶が勧進帳を読み、無事に義経一行と共に超えた安宅関。謡曲「安宅」や歌舞伎「勧進帳」で有名。

※黒汗<sup>ニ</sup>からだ黒くよごれるのもかまわず働いて流す汗。よごれのために黒ずんだ汗。

始 黒谷で兜にかはる丸頭巾 花本 一詠舎

き 目覚しに虫取裏のたばこ畑 ナゴヤ 鷺川

物 草臥た力になるハ一里づか 卷本 朝浦

ツギ 古へも今も替らぬ五文取 ウチコシ 白夜

※五文取<sup>ニ</sup>江戸時代、一つ五文で売った餅<sup>もち</sup>。駿河国（静岡県）安倍川の、安倍川餅などが有名。

折 二子山麓の木の葉黄ばみけり 卷本 朝浦 七ウ」

水 道者迄手伝ふ宇治の茶摘時 イボ 一峯

朝 草鞋を上げる宿屋の台所 トノガイツ 一睡舎

▲ けふも又楊貴妃と双六をふる イボ 漁笛  
▲ けふも又茶釜かたげて行れたり ナワ 闇鳥  
日本 情出しやれ銭でなければ明ぬ娑婆 トノガイツ 九臯齊  
わ 木食の食ひろふ僧たち ナゴヤ 禿紫

※木食<sup>ニ</sup>木の実や草などを食べて修行をすること。また、その人。高野山の復興に尽くした安土桃山時代の応其<sup>あうこ</sup>（木食応其）は、広く木食上人の名で知られるが、江戸時代前期には摂津の勝尾寺で苦行を続け霊験あらたかな僧として知られた以空、中期には京都五条坂の安祥院中興の祖となった養阿、江戸湯島の木食寺の開基として知られる義高、後期には特異な様式の仏像を彫刻して庶民教化に尽くした五行（木喰五行明満）があらわれるなど、木食上人として崇敬された高僧は少なくない。

命 相の山越して連待信濃者 トノガイツ 九臯齊

※相の山<sup>ニ</sup>（間山）三重県伊勢市の地域名。伊勢神宮の内宮と外宮との間にあった旧街道間の道の、牛谷坂と尾部坂の間の丘陵。近世には、参拝客相手の物もらいや大道芸人が集まり、間の山節や松原踊りなどの興行でにぎわった。

※信濃者<sup>ニ</sup>信濃国（長野県）の人。特に、江戸時代、農閑期を利用して、江戸へ出かせぎに出た季節労働者をさす。毎年、陰暦一月頃江戸へ出て、米つき、飯たき、まき割りなどの雑役に雇われ、翌年二月頃に帰郷していった。大飯ぐらいの代表者とみなされ、また、いなか者の代名詞のようにも用いられた。信濃<sup>ニ</sup>つべい。おしな。しな。しなの。

成 鶯に百人ながら気も付ず 、 一睡舎

句 昨日ともけふとも知らで桜狩 イボ 花月堂

折 藤咲て古寺の庭奇麗なり ナゴヤ 呂洲 八才」



無 両耳に鑲<sup>クハシ</sup>を付たる達磨どの ナゴヤ 古夕<sup>コセ</sup>

※鑲<sup>クハシ</sup>＝金属などでできた輪。耳輪。

た 御本陳<sup>ゴホンチン</sup>(陣) ハしづかなる門止<sup>カドドメ</sup>、 鸞川

※門止<sup>カドドメ</sup>＝門を閉め、出入りをとめること。また、その家への出入りを禁止すること。特に、外出を禁ずること。禁足。

▲ 朧月明石から舟上<sup>フナウミ</sup>られる、 岸古

▲ それ見たか古句ハほんの紙よごし グワチバラ 泉軒  
朝 馬子唄の霞にとゞく金の鱸(鰯) ナゴヤ 呂洲

日本 赤人のよまれし富士の朝けしき ヨコ子 是此亭

※田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつ  
つ 山部赤人(『新古今和歌集』巻八675)

よ 中入<sup>ナカイレ</sup>の出た帯笑ふ古手買 花本 一詠舎

※中入<sup>ナカイレ</sup>(なかいれ)＝着物や帯などの表地と裏地の間に入れる、綿や布をいう。中入綿や帯芯など。

※古手買<sup>コテカイ</sup>＝古着や古道具などを買うことを職とする人。

是 玉垣に鈴虫下馬に轡虫 ウチコシ ばんぐ堂  
ツギ 古へも今もやっぱり豊山 タカハマ 瑚雪

折 初蟬の啼声暑き野茶屋哉 八艸 可遊 八ウ  
き 薊織る背中の暑きいぶし瓶 ナゴヤ 甫水

わ 角力の地取に焚く風呂の下、 尹之  
※地取<sup>ヂトリ</sup>＝相撲の稽古。また、自分の属する部屋の土俵で、稽古

のためにとる相撲。内取り。

▲ 小雨降り灯籠すへてたばこ吞、 呂洲  
▲ 呼び合並木で旦那替て行 花本 一詠舎

無 渋い目で常香かへる医師の弟子 イボ 山月  
※常香<sup>ジョウカウ</sup>＝仏前に供えて常に絶やすことなくたく香。

日の 借て来た鈴振て見る寒参り ナゴヤ 鸞川

※寒参<sup>サムイ</sup>＝寒の三〇日間、信心や祈願のため、毎夜神仏に参詣すること。また、その人。素膚に白衣を着け白鉢巻をしめ、鈴を

振りながら行なう。裸参り。寒もうで。《季・冬》  
思 酒あひて丸綿を脱ぐ棧敷下、 尹之

※丸綿<sup>マルワタ</sup>＝綿帽子の種類の一。丸く頭部全体を覆う形のもの。

江戸前期上方の文学作品に見えるものは婦女の外出用であるが、後期の江戸の文学作品に見えるのは婚礼時の新婦のかぶり物である。

▲ 裏門で貝吹かけて止るなり イボ 山月  
※貝吹<sup>カイフキ</sup>き＝法螺貝を吹き鳴らし合図をしたり、号令を発したり

すること。また、その役の人。

▲ 弁天は六福神になぶられる ウチコシ 蛙井  
折 船曳の踏よじり行岸の萩 花本 一詠舎 九才

よ 星合のたぐり寄たる七日の夜 タモミ 柳風

※星合<sup>ホシアヒ</sup>＝陰暦七月七日の夜、牽牛・織女の二星が会うこと。《季・秋》

た 袖引留て天のはし立 本郷 連中  
▲ 呼び合夕立過た戸を明る ナゴヤ 鸞川

▲ 目出たがり一寸盃かぶられた 三本木 葉木  
朝 音楽の半ハ神轡<sup>カミツル</sup>(興力)を昇上る ヨコ子 是此亭

※昇上<sup>カミツル</sup>る＝かつぎあげる。かついであげる。

き 麦刈の落穂を拾ふ鉄頭 ナゴヤ 甫友  
命 堀越に我身を盗むぬけ参 花本 一詠舎

※花本は現在の愛知県豊田市。「抜け参り」は、親や主人など、また村役人の許可なしに伊勢参りに行くこと。「抜け参りの者

には道中どこでも金を貸してくれた。あとで借りた金を返済しなければお参りした効果がなくなるといわれていた。若者組の行事となった所もあり、三河国（愛知県）西加茂郡拳母町（豊田市）の例をあげると、毎年十二、三歳から十五、六歳の青年男女が後見人を頼んで伊勢参りをした。皆、家には告げずに出かけ、費用は後見人がいっさい立て替えておく。子供たちは普段着のまま出かけたという。やがて家々でも抜け参りとわかるので、帰郷の際迎えに出て神社で解散した。後見人の立て替えはのちほど清算したという」（『日本大百科全書（ニッポニカ）』）。

成

瓶破れたやうに這出す枕蚊帳

本郷 連中

※枕蚊帳Ⅱ大人の昼寝や、幼児を寝かせるときに使用する小型の蚊帳。骨に麻織りの蚊帳を覆い、骨によって開閉するように作る。

又

いせ土産くれるであらふ一里半 イワサキ 泉風

※「伊勢土産呉れるであらふ」と「暮れるであらふ一里半」と読み分ける。

折

降るが雪ぬれよ茶を焚木々も有 ムメガツボ 無正庵

九ウ

日の かつらぎの神いそがしき橋普請

ナカ子 秋狐

※かつらぎ（葛城）の神Ⅱ奈良県葛城山の山神。特に、一言主神。また、昔、役行者の命で葛城山と吉野の金峰山との

間に岩橋をかけようとした一言主神が、容貌の醜いのを恥じて、夜間だけ仕事をしたため、完成しなかったという伝説から、恋愛や物事が成就しないことのたとえや、醜い顔を恥じたり、昼間や明るい所を恥じたりするたとえなどにも用いられる。また、謡曲『葛城』にもなる。

思

間に合の初心の一句秀に入り

マエグマ 満花

▲

弁天を追取まひて蓮がさく

ナゴヤ 鷺川

▲

むちやくちやに成て蒙古ハ戻りけり

ヲヤマ 志同

思

孝行が知れて鷹野の御立寄

ナゴヤ 尹之

無

※鷹野Ⅱ鷹を使って山野で鳥獣をとること。鷹狩。《季・冬》

命

酒好が餅屋の店をおかしがり トノガイッ

九臯齊

▲

大湊見付てたばこ吸付る

大ワキ 鷺橋

▲

裏門へ隠居床台で釣て来る

ナゴヤ 鷺川

※

床台Ⅱ縁台。

又

伊勢土産かいをくれたり立相場

、 霞夕

※「伊勢土産貝をくれたり」と「買い遅れたり立相場」と読み分ける。

折

葉桜や奈良越くらき登り坂

ビハジマ 兎六 十才

始

清正が珍しう喰ふ日本米

イボ 漁笛

た

兜を乳母が着せる初陳（陣）

花本 一詠舎

▲

それ見たか坊主じゃと荷を渡す也

ナゴヤ 甫水

▲

湖へふはりと笠を落いたり

巻本 朝浦

き

御請儀を聞てハなふて見にわせた クハチバラ 泉軒

※

わせる（座せる）Ⅱ「来る」「ある」「いる」などの尊敬語。

一

いらっしやる。おいでになる。敬意はあまり高くない。わす。

※

判官は源義経の俗称。

ナゴヤ 蝶々子

※

腹は、「腹で行く」（大胆に行動する。はったりで行く）や「腹を合わす」（心を通じ合わせる。共謀する）、「腹を据える」（覚悟をきめる）等の略か。ここから、安宅関で富樫に見とがめられ、疑惑を解くために、強力に身をやつした義経を、弁慶が金

剛杖で打った場面を想起する。

玉 悟道得し御身も落馬の女郎花

八艸 可遊

▲ 弁天へ若衆の絵馬を上てなり

コシド 龍水

▲ 小雨降る道々時を問て行

三本木 葉木

折 福藁や冬ハ雀も来た所

巻本 朝浦 十ウ

※福藁 正月に家の門口や庭に敷く新しい藁。不浄を除くためとも年賀の客を迎えるためともいう。《季・新年》

神徳の普くて四方の風士いはけなきも三ツ輪くむ／翁もく

(ち) ずさみもてはやしてかく大巻とハ／なりぬ。されバ鸞子のゑらみを乞てか、げ／奉る事しかり

※いはけなし 子どもっぽいさま。幼稚なさま。

※三輪組む 足腰の三重に折れかがまる形容。きわめて年をとる。

※くずさみ 口ずさみの脱字か。詩歌などを思いつくままに吟ずる。

広前や仰げバ高き雁の声

朝浦

影も目出たき峯の三日月

鸞亭

糸す、き鈴舟漕げバ鈴鳴りて

朝浦

※鈴船 鈴のついた船。駅馬に鈴をつけて証明としたと同じように、鈴をつけた官船という語か。

文化二乙丑年

八月撰之

裏表紙見返し

## 注

(1) 可笑著 未刊本。役者評判記に見立て、名古屋名物や有名人評判

などを記して、文化初年頃の名古屋の世相を描いた書。『名古屋叢書』

第十六卷「風俗芸能編」(1) (愛知県郷土資料刊行会 一九八二年) 所収。

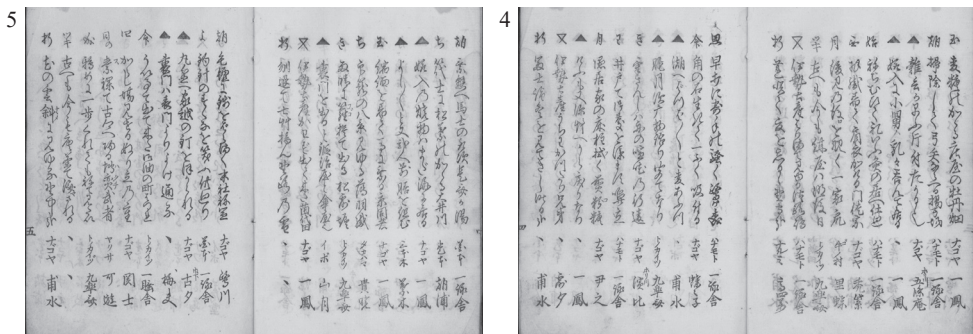
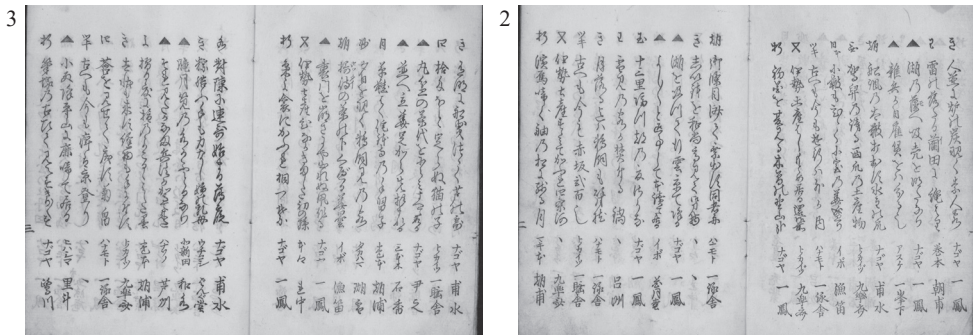
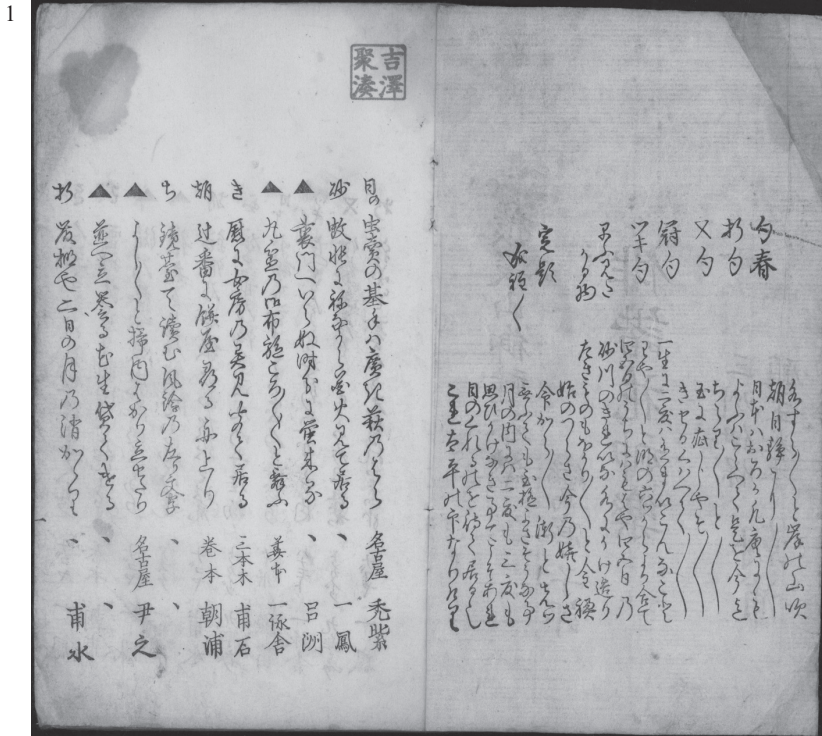
(2) 鈴木勝忠校訂『天保名古屋狂俳集』(『雑俳集成』第一期12 東洋書院 一九八五年) 所収『俳諧梅催集』(五頁)。

## (付記)

本稿を為すにあたり、貴重な資料をご提供いただきました吉沢義夫氏には心より謝意を表します。

\*生活科学部 生活環境デザイン学科

【付】図版 柳江庵撰会所本『俳諧花神楽』 ※表紙は一四頁に掲出。  
左上の数字は、図版左端（柱）の丁数番号と同じ。以下同じ。





## 柳江庵鸞亭撰会所本『俳諧花神楽』の紹介と翻刻

[illegible][illegible][illegible]

裏表紙